

学位請求論文審査報告要旨

2019年7月10日

学位請求者 田尻歩

論文題目 戦後日米芸術理論と実践におけるマルクス主義理論の影響と再創造

論文審査委員 井上間従文
越智博美
高島直之

1. 本論文の構成

本論文「戦後日米芸術理論と実践におけるマルクス主義理論の影響と再創造」は、赤瀬川原平、彦坂尚嘉、中平卓馬、アラン・セクーラ、マーサ・ロスラーらの芸術・写真理論および写真作品の集中的な読解を通して、1960年代以降の日本とアメリカにおけるニューレフト運動の社会的文脈と密接な接点を持つこれらの芸術家におけるマルクス主義思想の受容と、その再創造の位相を明確にするものである。1930年代から1950年代初頭に生まれたこれらの芸術家・写真家はみなベトナム反戦運動、大学闘争、フェミニズム運動、脱植民地化闘争などの社会運動に直接的・間接的に関わるなかで作品制作を行うだけでなく、自らの作品が社会政治的文脈に及ぼす批判的効果について積極的な理論化を行った点で特異な存在であった。本論文はこれら作家・写真家についての研究が盛んになった1990年代以降に今に至るまで稀であった1960年代の社会運動や思想との接点、特に「西欧マルクス主義」の思想家たちの著作の受容を軸としてそのテキストと作品の読解を行うものである。

本論文はこの目的を達成するためにまず、これら日米の作家・写真家たちがいわゆる「西欧マルクス主義」思想家とされるヘルベルト・マルクーゼ、ベルトルト・ブレヒト、アンリ・ルフェーヴル、ヴァルター・ベンヤミンらの著作で展開される資本と芸術との緊張関係をいかに解釈し、自らの創作理論の土台として据えたかが精読を通して明らかにされる。この読解を通して作家・写真家たちが、資本主義の社会形態を支えるアイデンティティを反復する素朴な「リアリズム」と、作者と観者における構想力と悟性の戯れを重視する素朴な「フォーマリズム」という両極を退け、資本主義の文化表象が排除する生の批判的「経験」に潜む社会変革への可能性を開示する「批判的リアリズム」の理論化を行っていたことを明らかにする。本論文はこうした視点から作家・写真家たちの作品の精読も行い、特に1970年代以降の都市空間をグローバルなロジスティクス（兵站・物流）のネットワーク的連関の中で捉え返すことで、この空間的広がりにて隠蔽される人々の疎外された労働のあり方を暴露するのみならず、そこから逸脱する無為の空間や謎めいた事物のあり方を開示するものとして写真作品を読み解いた。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

資本主義社会における芸術の存在論

アドルノの美学理論

ブレヒトと弁証法的リアリズム

戦後経済と空間の再編成

「ロジスティクス革命」と都市、階級闘争

第一章 赤瀬川原平の唯物論

赤瀬川の1960年代の芸術観

都市のイメージの変遷

直接行動としての超芸術トマソン

第二章 「日本現代美術」の歴史記述とマルクス主義理論

未生の「日本現代美術の独自性」

転覆なき反復

(日本の) アヴァンギャルドの死後の生

第三章 中平卓馬のシュルレアリスムの実践

「存在の闘い」としての写真理論—全共闘、沖縄、シュルレアリスム

撮影行為としてのシュルレアリスムの実践とその時間性—都市と反乱

過渡的著作としての「なぜ、植物図鑑か」

二重の自由としての写真—写真集『Documentary』

第四章 アラン・セクーラの批判的リアリズム

1980年代の写真・芸術理論の発展におけるリアリズム

階級闘争を基底とする写真理論

世界の構造の変化と海—《フィッシュ・ストーリー》

政治的地理学による肉体労働と精神労働の分離の批判

二つの抽象の批判と世界史的暴力の忘却に抗う実践

第五章 マーサ・ロスラーの唯物論的フェミニズム

社会主義フェミニズムと芸術

社会的実践としての表象行為—経験、社会関係、表象

批判的ドキュメンタリーとしての“*In the Place of the Public: Airport Series*”

2. 本論文の概要

序章においては、日本と合衆国におけるニューレフト運動が「美術史」という学問領域に与えた影響および「マルクス主義」理論の学問上の位置付けの変遷を簡単に追った後、各章の構想に関わる理論的枠組みを提示する。日本の美術史の言説においては、テオドル・アドルノの『美の理論』の議論は視覚芸術や現代芸術実践とはあまり関連づけられて論じられないことがないが、アドルノの美学理論は資本主義のもとでの芸術の存在論を根本的な次元で思考したという点で、現代芸術を思考する際に必須である。そこで本章では、アドルノ美学における社会編成から暫定的に自律するがゆえに特に形式（フォーム）の面で一定の社会批判を行うことができるという議論を再構成する。さらにアドルノにおける批判的フォーム理解を、一般的にその論敵とされるベルトルト・ブレヒトの「リアリズム」論との緊張関係のもとで捉え返すことで、芸術の社会からの暫定的自律性が資本による支配と搾取の構造について人々が学び、それを転換するための欲望を喚起する可能性を持つことを強調する。またヴァルター・ベンヤミンにおける「体験」(Erlebnis)ならざる「経験」(Erfahrung)概念が経験に批判的反省を加えるものであるという視点を導入することで、アドルノの美学理論とブレヒトのリアリズム美学とを架橋した。本章の後半ではこうした視点に立って、赤瀬川、中平、セクーラ、ロスラーなどの作家・写真家たち自らが、マルクーゼ、ベンヤミン、ジェイムソンなどの著作を実際に読み、さらにセクーラとロスラーに関してはマルクーゼなどと直接の交流を持つことで、芸術の自律性と政治性を架橋する思考をそれぞれの日米における文脈から写真の実践として行っていたことを明示した。

第1章では、赤瀬川原平(1937-2014)の『オブジェを持った無産者』(1970)の読解を行い、1960年代における彼の芸術の考えを分析した。ここでは「模型ニセ千円札」(1963)に代表される赤瀬川の「オブジェ」制作が、権力が構成する事物の模倣を通して、その権力が布置する物体と主体のあり方を中断する「瞬間」を生み出す可能性を秘めた実践だったとの分析がなされる。また1970年6月の安保闘争敗北、1972年のあさま山荘事件などを経て日本の新左翼運動の衰退が顕

著となった1970年代中盤以降の赤瀬川による著作『鏡の町 皮膚の町』（1976）や1980年代前半の「超芸術トマソン」（『写真時代』に連載）などの活動を資本主義による都市空間の暴力的な再編から逃れようとする集団性の獲得を目指した実践であったと分析し、これをアヴァンギャルドの系譜において読解した。つまりは高度なスキルを持たない「アマチュア」たちが資本が支配的な空間の隙間そのものを「無為」のオブジェとして収集し、品評しあうことで偶発的な集団性へと導かれていく赤瀬川の実践には、アヴァンギャルド的方法と精神を再活性化する契機が残存していたことを明らかにした。「トマソン」での写真、テキスト、現場、雑誌、展示を横断する表象のあり方はセクーラ、ロスラーなどテキストを重視する写真家たちを本論後半での議論を先取りしている。他方で1980年代以降の赤瀬川が自らのアバンギャルド実践を日本文化論の枠組みで語ってしまう問題は、次章においてさらなる分析の対象となる。

第2章では、まずはイギリスの哲学・美術史研究者 Peter Osbourne の著作を参照し、「コンテンポラリー・アート」と呼ばれる美術制度が、冷戦体制崩壊後の近代資本主義社会が想定する単一かつ普遍的な時間の流れと、その普遍的時間図式の諸要素として特殊化される複数の文化表象とを統制する文化産業の一形態であるとの視座を提示する。その上で戦後日本の歴史的文脈に視点を移し、日本の美術界が「前衛芸術」「戦後美術」といったオルタナティブな視点を消し去ることで「現代美術」という区分を制度化し、さらにこの制度化に際して批評理論の導入がなされなかったことで「現代」の歴史性を批判的に開示することが困難となった点へと議論を接続する。ここで本章は、日本における「現代美術」批評を日本の文化やアイデンティティというナショナルな前提を維持するかたちで語るテキストの主要例として千葉成夫の『現代美術逸脱史 1945-1985』（1986）と榎木野依『日本・現代・美術』（1998）の内在的読解を行う。具体的には千葉における「ポイエーシス」から「プラクシス」への転換を可能にする「日本」美術の線的な発展史論と、榎木におけるアメリカ覇権下で忘却することを余儀なくされた、失われたものとしての「日本」アイデンティティ論が分析の対象となる。ここで想起すべきは千葉と榎木が依拠しながらも吟味することがない彦坂尚嘉の『反覆—新興美術の位相』（1974）の重要性である。彦坂における同一性の「反復」では決してない「反覆」概念の精読を行うことで、彼の1960年代末前後の理論的思考が歴史的規定性の余白に存在する可能性を反復・増幅することで資本と国家の連関から逸脱する民衆の生成に寄与する美術のあり方を模索していた点を分析する。

第3章では写真家中平卓馬(1938-2015)の1970年代後半までの写真と美学に関する著作をシュルレアリズムの観点から精読し、その成果に則り彼の晩年の写真集『Documentary』（2011）における事物の形式を綿密に分析した。本章ではある決まった表現様式としてのシュルレアリズムではなく、「生」の可能性の条件を批判的に刷新するための方法論としてシュルレアリスムという見方を採用し、その観点から中平における批判的シュルレアリスムとも言えるメソドロジーのあり方を分析した。中平研究はこれまで『なぜ、植物図鑑か』（1972）の読解に依存してきたとも言えるが、ここでは『決闘写真論』（1977）に収録された「歴史への意志—シュルレアリスムの潜在的な力」や一連のウジェーヌ・アジェ論でのシュルレアリズム理解をより明確化することで、中平の写真論全体を再読する。この読解から、中平がシュルレアリズムの意義を美的領域にて措定しただけでなく、彼に「けいれん性の衝撃」を与えたとされる全学共闘会議（全共闘）が東京と沖縄などを横断する形で模索した社会変革のプログラムのあり方にも見出していたことが浮き彫りとなる。同章の後半では、こうした中平の写真的シュルレアリズムを解読したうえで、本章の広範では中平の写真集『Documentary』（2011）に収録された写真の具体的な読解を行う。同書での中平の写真が縦に伸びるフォーム、夢を見る動物、人間を眼差さない彫像などの「謎」（エニグマ）を主体と事物を疎外形態から解放する手がかりとして用いていることを読解する。

第4章はその前半部分でアメリカの写真家・批評家アラン・セクーラ(1951-2013)が1970年代前半から1980年代半ばまでに執筆した写真理論を精読し、彼のテキストにおける精神労働と肉体労働の分離をめぐる議論を再構築する。これまで日本の写真研究の言説においては、セクーラの写真理論の理論的参照先—ミハイル・バフチンの言語理論、ハリー・ブレイヴァーマンの労働過程の議論など—には十分な注目が与えられず、それゆえそのマルクス主義的な側面と「リアリズム」的側面は十分に理解されてこなかった。本章前半部では1980年代以後イギリスおよびアメ

リカにおいて発展してきた写真研究の文脈を批判的に見直しつつ、当時支配的になっていった写真研究における写真理論とセクーラの理論の違いを明らかにした上で、1980年代以後価値が引き下げられていたリアリズム概念の批判的理解の可能性を示した。ここでは特にセクーラが写真の「指標性」をメディアの特殊性のみに縮減することなく、メディアを解釈する観者と、観者を取り囲むメディアを含む文化一般を解釈の場に導くより広範なものであること示す。本章後半部では、セクーラの写真理論の読解を念頭に、彼の代表作である写真集『フィッシュ・ストーリー』(1995)の分析を行う。この作品が1950年代後半から普及し始めたコンテナ輸送の技術的發展に着目し、海という不可視化されたグローバル空間における物流と労働さらには戦争の再編成を主題化することを明らかにする。

最終章においては、合衆国の芸術家マーサ・ロスラー(1943-)の批評的文章と写真集 *In the Place of the Public: Observations of a Frequent Flyer*(1998)を分析する。ロスラーは *House Beautiful: Bringing the War Home* (1967-1972)などの写真コラージュ作品においてベトナム戦争期アメリカの戦場と「家庭」におけるジェンダー規範の再生産を問題化したが、本章ではこうした初期ロスラーにおける「私的」および「公的」領域を構成するジェンダー化された権力への批判が、後年の都市や空港での強いられた移動をめぐる作品群に結実していく過程を綿密に分析する。空間編成に批判的に介入するロスラーの方法論が、彼女が盟友のセクーラとともにサンディエゴにて読解したアンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』(1974)における「空間の表象」と「表象の空間」との対立をめぐる理解に多くを負っていることを精読を通して明確にする。その上でロスラーの戦略がジェンダー化されたアイデンティティの承認を要求する文化的フェミニズムの範疇には収まらず、ジェンダー化や人種化が強いる労働のレジームにも変更を迫るという意味での唯物論的フェミニズムの潮流に属することを1960年代以降のアメリカにおけるフェミニズム思想と運動の進展の系譜読解から読み解く。その上で、写真集 *In the Place of the Public* を分析し、この写真集が資本と労働の通過点としての空港に着目し、そこを通り過ぎる人々が「気散じ」状態へと誘導されることでとも自らの疎外感を言語化しえない問題を取り上げていることを議論した。

3. 本論文の成果と課題

本論文の第一の成果として、昨今の日米美術史・写真史研究でも盛んに取り上げられる赤瀬川、中平、セクーラ、ロスラーといった作家・写真家の理論的・方法論的著作にまずは着目し、それらを1960年代末前後のニューレフト運動の文脈に据え直すことで「西欧マルクス主義」受容・解釈の諸実践として再解釈を行った点があげられる。これまで特に日本においては写真のメディア性に特化したかたちでその創作の独自性が評価されてきた作家・写真家たちが、実際には特定の社会運動の中でマルクス主義美学論・芸術論を読むことで自らの写真活動の方法論へと到達したことを本論文は明快に描いている。本論文はそれらの読者でもあった作家・写真家たちが社会構造と美的形式との間に生産的齟齬と亀裂を見出し、それを言語化する理論家でもあったことを分かりやすい記述で伝えるものである。これら作家・写真家たちが日本とアメリカの具体的な社会運動とその周辺の文脈にてマルクーゼ、ベンヤミン、ルフェーブルなどを具体的に読解、解釈する作業を経てそれぞれの写真理論を練り上げていく過程についての記述は本論の中でも重要かつ説得力に富む部分である。特に中平におけるシュールレアリズムのあり方については中平や雑誌『*provoke*』が世界的な注目を集める昨今の研究状況においてもこれまで看過されてきた問いである。本論文において中平の批判的シュールレアリズムとも言える方法論が彼のキャリア全体と同時代の社会文脈の双方を視野にいれる形で分析されたことの意義は大きい。またセクーラとロスラーを論じる第4、5章でも、カリフォルニア大学サンディエゴ校の視覚芸術学科の大学院生であったこれら写真家が、マルクーゼとジェイムソンから直接マルクス主義美口について学びながらも、海軍基地やメキシコ国境に接する場から独自の「リアリズム」の構想と実践へと至ったプロセスについての記述も丁寧な調査と分析に支えられている。こうした研究も英語圏でのセクーラ、ロスラー研究にも大きく資するものである。

また、ベンヤミンにおける「体験」ならざる「経験」概念を媒介項とすることで芸術の暫定的自律性（アドルノ）と芸術の社会批判（ブレヒト）という一見対立関係にあるかに見える立場を架橋し、「批判的リアリズム」と筆者が呼ぶ視座へと結実させた点は本論文の理論的側面における成果の一つである。作品形式のエニグマティックな側面を重視しながらも、そのエニグマが社会構造を転換させる知的学習や社口運動を活性化させようとする筆者の視点は、本論文の一章と二章でも言及される「アバンギャルド」という姿勢の擁護ともつながるものであり、こうした問題提起はメディウム論に縮減された「モダニズム」研究と、カルチュラル・スタディーズの社会表象批判に縮減された「現代美術」評論のいずれもの限界を指摘しうる重要なものである。また本論文ではフランクフルト学派およびその周辺の思想家・作家たちの思想を受容し、独自のリアリズム議論へと進めたイギリスのマルクス主義美学研究者たちの著作が重要な位置を占めていることは明らかであるが、「西欧マルクス主義」の移動と受容はそうすると本論文の題材なだけでなく、手法にもその影響を与えている。この論争的な視点の提示は、今後さらに精緻なものとなることで、本論文が関与する日米の美術史・写真史研究に大きな貢献をしようするものである。

このような成果と魅力を備えた本論文であるが、いくつかの課題があることも事実である。

第一に作家・写真家たちが経験と表象の亀裂の中で練り上げた写真理論の考察が主眼とされることで、これら作家・写真家たちの写真作品が各自の理論の応用として読まれる箇所が時折見受けられる点が挙げられる。特に4章と5章ではセクーラとロスラーの写真への視点がやや希薄になっている。理論（著作）と作品（写真）の間には、それぞれの作者が「同じ」であっても、筆者が「経験」という言葉で示唆した構想力と知性との齟齬や亀裂が生産的なかたちで横たわるはずである。これらに開かれた読みをさらに行うことで写真論としての本論文の豊かな可能性がさらに発展し得たであろう。

第二に「疎外」「抑圧」といった1960年・70年代代の社会運動で用いられたタームに込められた意味合いを再評価しようとする際に、これらの語彙が喚起させる「抑圧仮説」（フーコー）に本論文も与してしまう箇所が数箇所ではあるが見受けられる。例えば中平の沖縄文化主義への依拠に関しては、本土の「現代美術」批評における日本文化主義への本論文での非常に明晰な批判と同程度の批判的読解が可能であったであろう。セクーラをめぐる議論でも、労働者である被写体の「抑圧」されていない「声」や「語り」などの可能性を時に表明するセクーラへのある程度の批判的読解を盛り込むことで、「批判的リアリズム」論としての本論の位置づけはさらに明確なものとなったであろう。

最後に、本論文は「戦後日米芸術理論と実践」を研究対象としているが、戦争、ロジスティクス、ジェンダーなどの諸問題が「日米」においていかに共有され、いかに看過されたかについての記述をさらに盛り込むことで、国境横断的な写真研究としての本論文の重要な側面もさらに明確になったであろう。

だがこうした点は本論の功績を損なうものではなく、それらについては筆者もすでに理解している点であり、今後の研究を進める中で解決がおおいに期待されるものである。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者田尻歩氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

2019年6月27日

学位請求者 田尻歩

論文題目 戦後日米芸術理論と実践におけるマルクス主義理論の影響と再創造

論文審査委員 井上間従文、越智博美、高島直之

2019年6月14日、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者 田尻歩氏の博士学位請求論文「戦後日米芸術理論と実践におけるマルクス主義理論の影響と再創造」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。